

腹が減ったので指をかじってみた。

意外にも美味かった。

さらに腹が減ったので、腕をかじってみた。

食べ応えがあった。

ますます飢えが抑えきれなくなったので、足をかじった。

筋張っていた。

いよいよたまらなくなつて、柔らかい腹をかじった。

湯気を立てる臓物を引きずり出し、くちやくちや音を立てて咀嚼した。

とろけるほどに甘く、豊かな香りが脳髄をしびれさせた。

頭をかじろうとして気がついた。

自分で自分の頭を食うことはできぬ。

仕方がないので、頭だけになって、外に転がり出た。

ごろりごろりと転がりながら、滋味溢れる人間を探す。

ごとりごとり。

やあ、君は本当に美味そうだねえ。

食ったはいいが、腹がないので肉も臓物もすべて落ちていく。闇に消えていく。

ああ、困った。

これではずっと腹が減りっぱなしだ。

食い続けねば。

永遠に。